

# フランドン農学校の豚

宮沢賢治

青空文庫



〔冒頭原稿一枚？なし〕

以外の物質は、みなすべて、よくこれを撮<sup>せつしゆ</sup>取して、脂肪<sup>しぼうもし</sup>若くは  
 蛋白<sup>たんぱくしつ</sup>質となし、その体内に蓄<sup>ちくせき</sup>積す。「とこう書いてあつたか  
 ら、農学校の畜<sup>ちくさん</sup>産の、助手や又<sup>また</sup>小使などは金石でないものなら  
 ばどんなものでも片<sup>かた</sup>つ端<sup>ぱし</sup>から、持つて来てほうり出したのだ。  
 もつと  
 尤もこれは豚の方では、それが生れつきなのだし、充<sup>じゆう</sup>分<sup>ぶん</sup>に  
 よくなれていたから、けしていやだとも思わなかつた。却<sup>かえ</sup>つてあ  
 る夕方などは、殊<sup>こと</sup>に豚は自分の幸福を、感じて、天上に向いて感  
 謝していた。というわけはその晩方、化学を習つた一年生の、生  
 徒が、自分の前に来ていかにも不思議そうにして、豚のからだを

眺<sup>なが</sup>めて居た。豚の方でも時々は、あの小さなそら豆<sup>まめがた</sup>形の怒<sup>おこ</sup>つたような眼<sup>め</sup>をあげて、そちらをちらちら見ていたのだ。その生徒が云<sup>い</sup>つた。

「ずいぶん豚というものは、奇<sup>きたい</sup>体なことになっている。水やスリツパや藁<sup>わら</sup>をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとえば生きた一つの触<sup>しょくばい</sup>媒<sup>ばい</sup>だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考えれば考える位、これは変になることだ。」

豚はもちろん自分の名が、白金と並べられたのを聞いた。それから豚は、白金が、一<sup>いちもんめ</sup>匁<sup>もんめ</sup>三十円することを、よく知っていたものだから、自分のからだが二十貫で、いくらになるということ

も勘<sup>かんじよう</sup>定<sup>じよう</sup>がすぐ出来たのだ。豚はぴたつと耳を伏<sup>ふ</sup>せ、眼を半分だけ閉じて、前<sup>まえ</sup>肢<sup>あし</sup>をきくつと曲げながらその勘定をやったのだ。  
 $20 \times 1000 \times 30 = 600000$  実に六十万円だ。六十万円といったならそのころのフランドンあたりでは、まあ第一流の紳士<sup>しんし</sup>なのだ。いまだつてそうかも知れない。さあ第一流の紳士<sup>しんし</sup>だもの、豚がすっかり幸福を感じ、あの頭のかげの方の鮫<sup>さめ</sup>によく似た大きな口を、にやにや曲げてよろこんだのも、けして無理とは云われない。

ところが豚の幸福も、あまり永くは続かなかつた。

それから二三日たつて、そのフランドンの豚は、どきりと上から落ちて来た一かたまりのたべ物から、（大学生諸君、意志を鞏<sup>き</sup>固<sup>こ</sup>にもち給<sup>たま</sup>え。いいかな。）たべ物の中から、一寸<sup>ちよつと</sup>細長い白

いもので、さきにもじかい毛を植えた、ごく率そつちよく直ちよくに云うならば、ラクダ印の齒磨はみがき楊子ようじ、それを見たのだ。どうもいやな説教で、折角洗礼を受けた、大学生諸君にすまないが少しこらえてくれ給え。

豚は実にぎよつとした。一体、その楊子の毛をみると、自分のからだ中の毛が、風に吹ふかれた草のよう、ザラツザラツと鳴つたのだ。豚は実に永い間、変な顔して、眺めていたが、とうとう頭がくらくらして、いやないやな気分になった。いきなり向うの敷しきわら藁わらに頭を埋うめてくるつと寝ねてしまったのだ。

晩方になり少し気分がよくなつて、豚はしずかに起きあがる。気分がいいと云つたつて、結局豚の気分だから、苹果りんごのようになさ

くさくし、青ぞらのように光るわけではもちろんない。これ灰色の気分である。灰色にしてややつめたたく、透明とうめいなるところの気分である。さればまことに豚の心もちをわかるには、豚になって見るより致いたし方ない。

外来ヨークシャイヤでも又黒いバクシャイヤでも豚は決して自分が魯鈍ろどんだとか、怠惰たいだだとかは考えない。最も想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしやつとやられたとき何と感ずるかということだ。さあ、日本語だろうか伊太利亜語イタリアだろうか独乙語ドイツだろうか英語だろうか。さあどう表現したらいいか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである。

さて豚はずんずん肥<sup>ふと</sup>り、なんべんも寝たり起きたりした。フランドン農学校の畜産学の先生は、毎日来ては鋭<sup>す</sup>い眼で、じつとその生体量を、計算しては帰って行つた。

「もう少しきちんと窓をしめて、室<sup>へや</sup>中<sup>じゆう</sup>暗くしなくては、脂<sup>あぶら</sup>がうまくかからんじやないか。それにもうそろそろと肥育をやつてもよからうな、毎日阿麻仁<sup>あまに</sup>を少しずつやつて置いて呉<sup>く</sup>れないか。」教師は若い水色の、上着の助手に斯<sup>こ</sup>う云つた。豚はこれをすつきり聴<sup>き</sup>いた。そして又大へんいやになつた。楊子のときと同じだ。折角のその阿麻仁も、どうもうまく咽喉<sup>のど</sup>を通らなかつた。これらはみんな畜産の、その教師の語気について、豚が直覚したのである。(とにかくあいつら二人は、おれにたべものはよこすが、時



々まるで北極の、空のような眼をして、おれのからだをじつと見る、実に何ともたまらない、とりつきばもないようなきびしいところで、おれのことを考えている、そのことは恐い、ああ、恐い。豚は心に思いながら、もうたまらなくなり前の柵を、むちやくちやに鼻で突つ突いた。

ところが、丁度その豚の、殺される前の月になって、一つの布告がその国の、王から発令されていた。

それは家畜撲殺同意調印法ほくさつといい、誰たれでも、家畜を殺そうというものは、その家畜から死亡承諾書しょうだくしょを受け取ること、又その承諾証書には家畜の調印を要すると、こう云う布告だったのだ。さあそこでその頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前

の日には、主人から無理に強<sup>し</sup>いられて、証文にペタリと印を押<sup>お</sup>したもんだ。ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄<sup>ていつ</sup>鉄をはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたつと証書に押したのだ。

フランンドンのヨークシャイヤも又活版刷りに出来ているその死亡証書を見た。見たというのは、或<sup>あ</sup>る日のこと、フランンドン農学校の校長が、大きな黄色の紙を持ち、豚のところをやつて来た。豚は語学も余程進<sup>よほど</sup>んでいたのだし、又實際豚の舌は柔<sup>やわ</sup>らかで素質も充分あつたのでごく流<sup>りゆう</sup>暢<sup>うちよう</sup>な人間語で、しずかに校長に挨拶<sup>あいさ</sup>した。

「校長さん、いいお天気でございます。」

校長はその黄色な証書をだまつて小わきにはさんだまま、ポケツトに手を入れて、にがわらいして斯<sup>こ</sup>う云つた。

「うんまあ、天気はいいね。」

豚は何だか、この語<sup>ことば</sup>が、耳にはいつて、それから咽喉につかえたのだ。おまけに校長がじろじろと豚のからだを見ることは全くあの畜産の、教師とおんなじことなのだ。

豚はかなしく耳を伏せた。そしてこわごわ斯<sup>こ</sup>う云つた。

「私はどうも、このごろは、気がふさいで仕方ありません。」

校長は又にがわらいを、しながら豚に斯<sup>こ</sup>う云つた。

「ふん。気がふさぐ。そうかい。もう世の中がいやになったかい。そういうわけでもないのかい。」豚があんまり陰<sup>いんき</sup>気な顔をしたも

のだから校長は急いで取り消しました。

それから農学校長と、豚とはしばらくしいんとしてにらみ合つたまま立っていた。ただ一言も云わないでじいつと立つて居おつたのだ。そのうちにとうとう校長は今日は証書はあきらめて、「とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。」例の黄いろな大きな証書を小わきにかいこんだまま、向うの方へ行つてしまふ。

豚はそのあとで、何べんも、校長の今の苦笑やいかにも底意のある語を、ことば繰り返し繰り返し見て、身ぶるいしながらひとりごとした。

『とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。』

一体これはどう云う事か。ああつらいつらい。豚は斯う考えて、まるであの梯形ていけいの、頭も割れるように思った。おまけにその晩は強いふぶきで、外では風がすさまじく、乾いた力サカサした雪のかけらが、小屋のすきまから吹きこんで豚のたべものの余りも、雪でまっ白になったのだ。

ところが次の日のこと、畜産学の教師が又やって来て例の、水色の上着を着た、顔の赤い助手といつものするどい眼付して、じつと豚の頭から、耳から背中から尻尾しっぽまで、まるでまるで食い込むように眺めてから、尖とがった指を一本立てて、

「毎日阿麻仁あまにをやつてあるかね。」

「やつてあります。」

「そうだろう。もう明日だって明後日<sup>あさって</sup>だって、いいんだから。早く承諾書をとれあいなんだ。どうしたんだろう、昨日校長は、たしかに証書をわきに挟<sup>はさ</sup>んでこつちの方へ来たんだが。」

「はい、お入りのようでした。」

「それではもうできてるかしら。出来ればすぐよこす筈<sup>はず</sup>だがね。」

「はあ。」

「も少し室<sup>へや</sup>をくらくして、置いたらどうだろうか。それからやる前の日には、なんにも飼料<sup>しりょう</sup>をやらんでくれ。」

「はあ、きつとそう致します。」

畜産の教師は鋭い目で、もう一遍<sup>いっぺん</sup>じいつと豚を見てから、それから室を出て行った。

そのあとの豚の煩悶<sup>はんもん</sup>さ、（承諾書というのは、何の承諾書だろう何を一体しろと云うのだ、やる前の日には、なんにも飼料をやっちゃいけない、やる前の日って何だろう。一体何をされるんだろう。どこか遠くへ売られるのか。ああこれはつらいつらい。）豚の頭の割れそうな、ことはこの日も同じだ。その晩豚はあんまりに神経が興奮し過ぎてよく睡<sup>ねむ</sup>ることができなかつた。ところが次の朝になって、やっと太陽が登った頃、寄宿舎の生徒が三人、げたげた笑って小屋へ来た。そして一晩睡らないで、頭のしんしん痛む豚に、又もや厭<sup>いや</sup>な会話を聞かせたのだ。

「いつだろうなあ、早く見たいなあ。」

「僕<sup>ぼく</sup>は見たくないよ。」

「早いといいなあ、困って置いた葱ねぎだって、あんまり永いと凍こつちまう。」

「馬鈴薯ばれいしょもしまつてあるだろう。」

「しまつてあるよ。三斗としまつてある。とても僕たちだけで食べられるもんか。」

「今朝はずいぶん冷たいねえ。」一人が白い息を手に吹きかけながら斯こう云いました。

「豚のやつは暖かそうだ。」一人が斯う答へたら三人共どつとふき出しました。

「豚のやつは脂肪でできた、厚さ一寸の外がい套とうを着てるんだもの、暖かいさ。」



「暖かそうだよ。どうだ。湯気さえはやはやと立っているよ。」  
豚はあんまり悲しくて、辛つらくてよろよろしてしまう。

「早くやつちまえばいいな。」

三人はつぶやきながら小屋を出た。そのあとの豚の苦しき、

(見たい、見たくない、早いといい、葱が凍る、馬鈴薯三斗、食いきれない。厚さ一寸の脂肪の外套、おお恐い、ひとのからだをまるで観透みとおしてるおお恐い。恐い。けれども一体おれと葱と、何の関係があるだろう。ああつらいなあ。) その煩悶の最中に校長が又やって来た。入口でばたばた雪を落して、それから例のあいまいな苦笑をしながら前に立つ。

「どうだい。今日は気分がいいかい。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいのかい。大へん結構だ。たべ物は美味おいしいかい。」

「ありがとうございます。大へんに結構でございます。」

「そうかい。それはいいね、ところで実は今日はお前と、内内相談に來たのだがね、どうだ頭ははつきりかい。」

「はあ。」豚は声がかすれてしまう。

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ。實際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それからごくつまらない乞食こじきでもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉につまって、はつきり返事ができなかつ

た。

「また人間でない動物でもね、たとえば馬でも、牛でも、にわとり鶏でも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあいかんのだ。蜉かげろうのごときはあしたに生れ、夕ゆうべに死する、ただ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きつと死ぬのにきまつてる。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事もなにもできなかつた。

「そこで実は相談だがね、私たちの学校では、お前を今日まで養つて来た。大したこともなかつたが、学校としては出来るだけ、ずいぶん大事にしたはずだ。お前たちの仲間もあちこちに、ずいぶんあるし又私も、まあよく知っているのだが、でそう云つちや

可笑<sup>おか</sup>しいが、まあ私の処<sup>ところ</sup>ぐらい、待遇<sup>たいぐう</sup>のよい処はない。」

「はあ。」豚は返事しようと思つたが、その前にたべたものが、みんな咽喉へつかえててどうしても声が出て来なかつた。

「でね、実は相談だがね、お前がもしも少しでも、そんなようなことが、ありがたいと云う気がしたら、ほんの小さなたのみだが承知<sup>もち</sup>をしては貰<sup>もら</sup>えまいか。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事がどうしてもできなかつた。

「それはほんの小さなことだ。ここに斯<sup>こ</sup>う云う紙がある、この紙に斯<sup>こ</sup>う書いてある。死亡承諾書、私儀<sup>ぎ</sup>永々<sup>ごおんこ</sup>御恩顧<sup>しだい</sup>の次第<sup>これあり</sup>に有<sup>あり</sup>候<sup>こう</sup>儘<sup>まま</sup>、御都合<sup>ごつごう</sup>により、何時<sup>いつ</sup>にても死亡<sup>つかまつ</sup>仕<sup>つかまつ</sup>るべく候<sup>こう</sup>年月日<sup>ど</sup>フランンドン畜<sup>ちくしや</sup>舎<sup>しゃ</sup>内、ヨークシャイヤ、フランンドン農学校<sup>ど</sup>長<sup>ちやう</sup>殿<sup>でん</sup> ところ

れだけのことだがね、」校長はもう云い出したので、一瀉千里いつしやせんりにまくしかけた。

「つまりお前はどうせ死ななけあいかないからその死ぬときはもういさぎよ潔く、いつでも死にますと斯う云うことで、一向何でもないよ。とき。死ななくてもいいうちは、一向死ぬことも要いらないよ。この処へただちよつとお前の前肢まえあしの爪印つめいんを、一つ押しておいて貰もらいたい。それだけのことだ。」

豚は眉まゆを寄せて、つきつけられた証書を、じつとしばらく眺めながていた。校長の云う通りなら、何でもないがつくづくと証書の文句を読んで見ると、まったく大へんに恐こわかった。とうとう豚はこらえかねてまるで泣声でこう云った。

「何時にてもとということとは、今日でもとということですか。」

校長はぎくつとしたが氣をとりなおしてこう云つた。

「まあそうだ。けれども今日だなんて、そんなことは決してないよ。」

「でも明日でもとということでしょう。」

「さあ、明日なんていうよう、そんな急でもないだろう。いつでも、いつかというような、ごくあいまいなことなんだ。」

「死亡をするということは私が一人で死ぬのですか。」豚は又金また切声で斯うきいた。

「うん、すっかりそうでもないな。」

「いやです、いやです、そんならいやです。どうしてもいやです

。「豚は泣いて叫んだ。

「いやかい。それでは仕方ない。お前もあんまり恩知らずだ。犬猫にさえ劣ったやつだ。」校長はぶんぶん怒り、顔をまっ赤にしてしまい証書をポケットに手早くしまい、大股おおまたに小屋を出て行った。

「どうせ犬猫なんかには、はじめから劣っていますよう。わあ」豚はあんまり口惜くやしさや、悲しさが一時にこみあげて、もうあらんかぎり泣きだした。けれども半日ほど泣いたら、二晩も眠らなかつた疲れが、一ぺんにどつと出て来たのでつい泣きながら寝込んでしまう。その睡りねむの中でも豚は、何べんも何べんもおびえ、手足をぶるっと動かした。

ところがその次の日のことだ。あの畜産の担任が、助手を連れて又やつて来た。そして例のたまらない、目付きで豚をながめてから、大へん機嫌きげんの悪い顔で助手に向つてこう云つた。

「どうしたんだい。すてきに肉が落ちたじゃないか。これじやま  
るきり話にならん。百ひやく姓しょうのうちで飼かつたつてこれ位にはでき  
るんだ。一体どうしたてんだろう。心当りがつかないかい。頬ほお  
肉くなんかあんまり減つた。おまけにシヨウルダアだつて、こん  
なに薄うすくちやなつてない。品評会へも出せあしない。一体どうし  
たてんだろう。」

助手は唇くちびるへ指をあて、しばらくじつと考えて、それからぼんやり返事した。



「さあ、昨日の午後ごごに校長が、おいでになっただけでした。それだけだったと思います。」

畜産の教師は飛び上る。

「校長？　そうかい。校長だ。きつと承諾書を取ろうとして、すてきなぶまをやったんだ。おじけさせちやったんだな。それでこいつはぐるぐるして昨夜一晚寝ないんだな。まずいことになったなあ。おまけにきつと承諾書も、取り損そこねたにちがいない。まずいことになったなあ。」

教師は実に口惜しそうに、しばらくキリキリ歯を鳴らし腕うでを組んでから又云った。

「えい、仕方ない。窓をすつかり明けて呉くれ。それから外へ連れ

出して、少し運動させるんだ。む茶くちやにたたいたり走らしたりしちやいけないぞ。日の照らない処を、きゆうしや厩舎の陰かげのあたりの、雪のない草はらを、そろそろ連れて歩いて呉れ。一回十五分位、それから飼料をやらないで少し腹を空すかせてやれ。すっかり気分が直ったらキャベジのいい処を少しやれ。それからだんだん直ったら今まで通りにすればいい。まるで一ヶ月の肥育を、一晩で台なしにしちまった。いいかい。」

「承知いたしました。」

教師は教員室へ帰り豚はもうすっかり気落ちして、ぼんやりと向うの壁かべを見る、動きも叫びもしたくない。ところへ助手が細いむち鞭を持って笑って入って来た。助手は囲いの出口をあけていねこく町

寧いに云つたのだ。

「少しご散歩はいかがです。今日は大へんよく晴れて、風もしずかでございます。それではお供いたしましょう、」ピシツと鞭がせなかに来る、全くこいつはたまらない、ヨークシャイヤは仕方なくのそのそ畜舎を出たけれど胸は悲しさでいっぱい、歩けば裂さけるようだった。助手はのんきにうしろから、チツペラリーのくちぶえ口ふ笛を吹いてゆつくりやって来る。鞭もぶらぶらふつている。

全体何がチツペラリーだ。こんなにわたしはかなしいのにと豚は度々たびたび口をまげる。時々は

「ええもう少し左の方を、お歩きなさいましては、いかがでございますか。」なんて、口ばかりうまいことを云いながら、ピシツ

と鞭を呉れたのだ。(この世はほんとうにつらい、本当に苦の世界なのだ。)こてつとぶたれて散歩しながら豚はつくづく考えた。

「さあいかがです、そろそろお休みなさいませ。」助手は又一つピシツとやる。ウルトラ大学生諸君、こんな散歩が何で面白い(おもしろ)だろう。からだの為(ため)も何もあつたもんじやない。

豚は仕方なく又畜舎に(もと)戻りごろつと藁(わら)に横になる。キャベジの青い所を助手はわずか持つて来た。豚は喰(た)べたくなかったが助手が向うに直立して何とも云えない恐い眼で上からじつと待っている、ほんとうにもう仕方なく、少しそれを噛(か)じるふりしたら助手はやつと安心して一つ「ふん。」と笑つてからチツペラリ

一の口笛を又吹きながら出て行つた。いつか窓がすっかり明け放してあつたので豚は寒くて耐たまらなかつた。

こんな工合ぐあいにヨークシャイヤは一日思いに沈しずみながら三日を夢ゆめのように送る。

四日目に又畜産の、教師が助手とやって来た。ちらつと豚を一眼見て、手を振りながら助手に云う。

「いけないいけない。君はなぜ、僕の云つた通りしなかつた。」

「いいえ、窓もすっかり明けましたし、キャベジのいいのもやりました。運動も毎日丁寧ていねいに、十五分ずつやらしています。」

「そうかね、そんなにまでもしてやって、やっぱりうまうまいかないかね、じゃもうこいつは瘠やせる一方なんだ。神経性營養不良な

んだ。わきからどうも出来やしない。あんまり骨と皮だけに、ならないうちにきめなくちや、どこまで行くかわからない。おい。

窓をみなしめて呉れ。そして肥育器を使うとしよう、飼料をどしどし押し込んで呉れ。麦のふすまを二升とね、阿麻仁あまにを二合、それから玉蜀黍とうもろこしの粉を、五合を水でこねて、団子にこさえて一日に、二度か三度ぐらいに分けて、肥育器にかけて呉れたま給え。肥育器はあつたろう。」

「はい、ございます。」

「こいつは縛しばって置き給え。いや縛る前に早く承諾書をとらなくちや。校長もさつぱり拙ますいなあ。」

畜産の教師は大急ぎで、教舎の方へ走って行き、助手もあとか

ら出て行つた。

間もなく農学校長が、大へんあわててやつて来た。豚は身体からだの置き場もなく鼻で敷藁を掘ほつたのだ。

「おおい、いよいよ急がなきゃならないよ。先頃せんころの死亡承諾書ね、あいつへ今日はどうしても、爪判を押して貰いたい。別に大した事じゃない。押して呉れ。」

「いやですいやです。」豚は泣く。

「厭いやだ？ おい。あんまり勝手を云うんじゃない、その身体からだは全体みんな、学校のお陰で出来たんだ。これからだつて毎日麦のふすま二升阿麻仁二合と玉蜀黍の、粉五合ずつやるんだぞ、さあいい加減に判をつけ、さあつかないか。」

なるほど斯<sup>こ</sup>う怒<sup>おこ</sup>り出して見ると、校長なんというものは、實際  
恐いものなんだ。豚はすっかりおびえて了<sup>しま</sup>い、

「つきます。つきます。」と、かすれた声で云つたのだ。

「よろしい、では。」と校長は、やつとのこときげんに機嫌を直し、手  
早くあの死亡承諾書の、黄いろな紙をとり出して、豚の眼の前に  
ひろげたのだ。

「どこへつけばいいんですか。」豚は泣きながら尋<sup>たず</sup>ねた。

「ここへ。おまえの名前の下へ。」校長はじつと眼鏡<sup>めがね</sup>越しに、豚  
の小さな眼を見て云つた。豚は口をびくびく横に曲げ、短い前の  
右<sup>みぎ</sup>肢<sup>あし</sup>を、きくつと挙げてそれからピタリと印をおす。

「うはん。よろしい。これでいい。」校長は紙を引っぱって、よ



くその判を調べてから、機嫌を直してこう云った。戸口で待っていたらしくあの意地わるい畜産の教師がいきなりやって来た。

「いかがです。うまく行きましたか。」

「うん。まあできた。ではこれは、あなたにあげて置きますから。ええ、肥育は何日ぐらいかね、」

「さあいざれ模様を見まして、鶏やあひるなどですと、きつと間違ふといなく肥ふとりますが、斯う云う神經過敏かびんな豚は、或あるいは強制肥育で甘うまく行かないかも知れません。」

「そうか。なるほど。とにかくしつかりやり給え。」

そして校長は帰って行つた。今度は助手が変てこな、ねじのついたズツクの管と、何かのバケツを持って来た。畜産の教師は云

いながら、そのバケツの中のを、一寸ちよつとつまんで調べて見た。

「せいじゃ豚を縛つて呉れ。」助手はマニラロープを持って、囲いの中に飛び込んだ。豚はばたばた暴れたがとうとう囲いの隅すみにある、二つの鉄の環わに右側の、足を二本共縛られた。

「よろしい、それではこの端はしを、咽喉のどへ入れてやって呉れ。」畜産の教師は云いながら、ズツクの管を助手に渡す。

「さあ口をお開きなさい。さあ口を。」助手はしずかに云つたのだが、豚は堅かたく歯を食いしばり、どうしても口をあかなかつた。

「仕方ない。こいつを噛かましてやって呉れ。」短い鋼はがねの管を出す。

助手はぎしぎしその管を豚の歯の間にねじ込こんだ。豚はもうあらんかぎり、怒鳴どなったり泣いたりしたが、とうとう管をはめられ

て、咽喉の底だけで泣いていた。助手はその鋼の管の間から、ズツクの管を豚の咽喉まで押し込んだ。

「それでよろしい。ではやろう。」教師はバケツの中のを、ズツク管の端の漏斗じょうごに移して、それから変な螺旋らせんを使い食物を豚の胃に送る。豚はいくら呑むのまいとしても、どうしても咽喉で負けてしまい、その練ったものが胃の中に、入ってだんだん腹が重くなる。これが強制肥育だった。

豚の気持ちの悪いこと、まるで夢中むちゆうで一日泣いた。

次の日教師が又来て見た。

「うまい、肥ふとった。効果がある。これから毎日小使と、二人で二度ずつやってみれ。」

こんな工合でそれから七日というものは、豚はまるきり外で日が照っているやら、風が吹いてるやら見当もつかず、ただ胃が無<sup>む</sup>暗<sup>やみ</sup>に重苦しくそれからいやに頬<sup>ほ</sup>や肩<sup>かた</sup>が、ふくらんで来ておしまいは息をするのもつらいくらい、生徒も代る代る来て、何かいろいろ云っていた。

あるときは生徒が十人ほどやって来てがやがや斯<sup>こ</sup>う云った。

「ずいぶん大きくなつたなあ、何貫ぐらいあるだろう。」

「さあ先生なら一目見て、何百目まで云うんだが、おれたちじゃちよつとわからない。」

「比重がわからないからなあ。」

「比重はわかるさ比重なら、大<sup>たい</sup>抵<sup>てい</sup>水と同じだろう。」

「どうしてそれがわかるんだい。」

「だって大抵そうだろう。もしもこいつを水に入れたら、きつと沈しずみも浮うかびもしない。」

「いいやたしかに沈まない、きつと浮ぶにきまつてる。」

「それは脂肪しぼうのためだろう、けれど豚にも骨はある。それから肉もあるんだから、たぶん比重は一ぐらいだ。」

「比重をそんなら一として、こいつは何斗あるだろう。」

「五斗五升はあるだろう。」

「いいや五斗五升などじゃない。少く見ても八斗ある。」

「八斗なんかじゃきかないよ。たしかに九斗はあるだろう。」

「まあ、七斗としよう。七斗なら水一斗が五貫だから、こいつは

丁度三十五貫。」

「三十五貫はあるな。」

こんなはなしを聞きながら、どんなに豚は泣いたろう。なんでもこれはあんまりひどい。ひとのからだをます枘ではかる。七斗だの八斗だのという。

そうして丁度七日目に又あの教師が助手と二人、並ならんで豚の前に立つ。

「もういいようだ。丁度いい。この位まで肥つたらまあ極度だろ  
う。この辺だ。あんまり肥育をやり過ぎて、一度病気にかかつて  
もまたあとまわりになるだけだ。丁度あしたがいいだろう。今日  
はもう飼えさをやらんでくれ。それから小使と二人してからだをすつ

かり洗つて呉れ。敷藁しきわらも新らしくしてね。いいか。」

「承知いたしました。」

豚はこれらの問答を、もう全身の勢力で耳をすまして聴きいて居た。(いよいよ明日だ、それがあの、証書の死亡ということか。いよいよ明日だ、明日なんだ。一体どんな事だろう、つらいつらい。) あんまり豚はつらいので、頭をゴツゴツ板へぶつつけた。

そのひるすぎに又助手が、小使と二人やって来た。そしてあの二つの鉄環てつわから、豚の足を解いて助手が云う。

「いかがです、今日は一つ、お風呂ふろをお召めしなさいませ。すつかりお仕度したくができて居ます。」

豚がまだ承知とも、何とも云わないうちに、鞭むちがピシツとやつ

て来た。豚は仕方なく歩き出したが、あんまり肥ってしまったので、もううごくことの大儀たいぎなこと、三足で息がはあはあした。

そこへ鞭がピシツと来た。豚はまるで潰つぶれそうになり、それでもようよう畜舎の外まで出たら、そこに大きな木の鉢はちに湯が入ったのが置いてあった。

「さあ、この中にお入りなさい。」助手が又一つパチツとやる。豚はもうやつとのこと、ころげ込むこようにしてその高い縁ふちを越えて、鉢の中へ入ったのだ。

小使が大きなブラッシをかけて、豚のからだをきれいに洗う。そのブラッシをチラツと見て、豚は馬鹿のように叫さけんだ。というわけはそのブラッシが、やっぱり豚の毛でできた。豚がわめいて



いるうちからだがすっかり白くなる。

「さあ参りましょう。」助手が又、一つピシツと豚をやる。

豚は仕方なく外に出る。寒さがぞくぞくからだに浸<sup>し</sup>みる。豚はとうとうくしやみをする。

「風邪<sup>かぜ</sup>を引きますぜ、こいつは。」小使が眼を大きくして云った。  
「いいだろうさ。腐<sup>くさ</sup>りがたくて。」助手が苦笑して云った。

豚が又畜舎へ入ったら、敷藁がきれいに代えてあつた。寒さばかりだを刺すようだ。それに今朝からまだ何も食べないので、胃ももうからになつたらしく、あらしのようにゴウゴウ鳴った。

豚はもう眼もあけず頭がしんしん鳴り出した。ヨークシャイヤの一生の間のいろいろな恐<sup>おそ</sup>ろしい記憶<sup>きおく</sup>が、まるきり廻<sup>まわ</sup>り廻<sup>まわ</sup>り燈籠<sup>どうろう</sup>籠<sup>ろう</sup>の

ように、明るくなったり暗くなったり、頭の中を過ぎて行く。さまざまな恐ろしい物音を聞く。それは豚の外で鳴ってるのか、あるいは豚の中で鳴ってるのか、それさえわからなくなった。そのうちもういつか朝になり教舎の方で鐘かねが鳴る。間もなくがやがや声がして、生徒が沢たくさん山やって来た。助手もやつぱりやって来た。「外でやろうか。外の方がやはりいいようだ。連れ出して呉れ。おい。連れ出してあんまりギーギー云わせないようにね。まずくなるから。」

畜産の教師がいつの間にか、ふだんとちがった茶いろなガウンのようなものを着て入口の戸に立っていた。

助手がまじめに入って来る。

「いかがですか。天気も大変いいようです。今日少しご散歩なすつては。」又一つ鞭をピチツとあてた。豚は全く異議もなく、はあはあ頬ほおをふくらせて、ぐたつぐたつと歩き出す。前や横を生徒たちの、二本ずつの黒い足が夢ゆめのように動いていた。

俄にわかにカツと明るくなった。外では雪に日が照って豚はまぶしさに眼を細くし、やつぱりぐたぐた歩いて行つた。

全体どこへ行くのやら、向うに一本の杉すぎがある、ちらつと頭をあげたとき、俄かに豚はピカツという、はげしい白光のようなものが花火のように眼の前でちらばるのを見た。そいつから億百千の赤い火が水のように横に流れ出した。天上の方ではキーンといするとう鋭い音が鳴っている。横の方ではごうごう水が湧わいている。さ

あそれからあのことならば、もう私は知らないのだ。とにかく豚のすぐよこにあの畜産の、教師が、大きな鉄槌てつづいを持ち、息をはあはあ吐はきながら、少し青ざめて立っている。又豚はその足もとで、たしかにクンクンと二つだけ、鼻を鳴らしてじつとうごかなくなっていた。

生徒らはもう大活動、豚の身体からだを洗った桶おけに、も一度新らしく湯がくまれ、生徒らはみな上着そでの袖を、高くまくって待っていた。助手が大きな小刀で豚の咽喉のどをザクツと刺しました。

一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとにはやめにしよう。とにかく豚はすぐあとで、からだを八つに分解されて、厩きゆう舎しやのうしろに積みあげられた。雪の中に一晚漬つけられ

た。

さて大学生諸君、その晩空はよく晴れて、金牛宮もきらめき出し、二十四日の銀の角、つめたく光る弦月げんげつが、青じろい水銀のひかりを、そこらの雲にそそぎかけ、そのつめたい白い雪の中、戦場の墓地のように積みあげられた雪の底に、豚はきれいに洗われて、八きれになって埋うづまった。月はだまって過ぎて行く。夜はいよいよ冴さえたのだ。



# 青空文庫情報

底本：「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

2001（平成13）年4月25日14刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：久保格

校正：林 幸雄

2003年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# フランドン農学校の豚

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>